中米における古代石造彫刻品について

——特にマヤ地域とその周辺地域を中心として——

貞 末 堯 司

目　次

1. はしがき
2. マヤ石造彫刻品の特質について
3. マヤ地域周辺地帯の石造彫刻品の諸問題
4. 中米の石造彫刻品の南米への系譜
5. 結　語

1. はしがき

中米におけるプレ＝コロンビアン文化を論ずる際には，オルメカ（Olmeca），テオティワカン（Teotihuacan），ミシュテカ（Mixteca），トルテカ（Tolteca），トトナコ（Totonaco），アステカ（Azteca）などの諸文明の存在を無視することはできないのは当然である。これら諸文明が相互に深い関係をもって，新大陸プレ＝コロンビアンの中米独自の文化圏を形成していたことは注意されなければならない。しかし，中米の諸高文明の中でも，特にマヤ文明が，その成立の頭初から終末までの長い期間にわたって，いわゆる「マヤ地域」という独自の文化圏を形成し，新大陸における最高の文明として命脈を保ち得た事実の裏には，多くの問題が含まれている。

マヤ文明はその内容において多岐にわたっている。従って一つの文化現象をつかまえて，ただそれだけで，その文明の本質を論議することはできないし，マ

ヤ文明の本質とは何かという問題は，勿論このような方法では解明されるものでもない。しかし，マヤ文明圏における石造彫刻，石碑に描かれた象形文字，浮彫などは，単なる美術的観賞の対象物ではなく，マヤ文明の編年に重要な意味をもつ資料でもある。プレ＝コロンビアンの新大陸石造彫刻品の多くが何等かの意味で，その文化の本質に迫り得る可能性をもっているのは，それが偏年的意味をもつ資料であるということからであろうが，マヤ石刻品のうちでも特にマヤ諸都市に立てられた石碑の多くが，象形文字とマヤ長暦[1]にみる日付をもっているという点を考えると，マヤ文明の中でも石碑の占める位置は極めて重要であるといわざるを得ない。このような意味でマヤの石彫品（石造彫刻品を以下石彫品という）は，中米の古代文明における一つのキイ・ストン的意味をもつものであろう。しかし，マヤの石彫品の多くが編年上の重要な資料であるといっても，描出された浮彫の意味内容の不明さや象形文字の未解読などの多くの点において問題があるのも事実である。様式論的には一つの様式の上に配列され得るとしても，長暦との関係では不明な点がでてくるのもマヤ石彫品の特色であろう。このようなことは，マヤ文明の内容が極めて多岐にわたるため，多くの他の文化要素が混入し，同時に周辺地域へのマヤ文明の影響がやがてそのリアクションとして周辺地域文化の吸収といった関係であらわれてくる結果かもわからない。いずれにしても，マヤ地域における石彫品，特にモノリシックなしかもモニュメンタルな石彫品の問題は，マヤ文明それ自体の解明に欠くことのできない課題でもあると同時に周辺地域の石彫品との対比の上で考えられるべき重要な問題を含んでいると解せざるを得ない。

マヤ地域という特殊な文化圏の周辺には，マヤ文明では認められないような独得な石彫品が存在し，ガテマラからパナマまでの中央アメリカの諸地域には非マヤ的石彫品が数多く報告されている。しかし，文化の地方性と文化的編年の相異という観点から，これら非マヤ的石彫品をそれぞれの地域文化の特殊性としてのみ語ることはできない。マヤ地域の中心部に位置する地点で非マヤ的石彫品が発見され，それと同系列の石彫品が，例えばガテマラの太平洋岸地帯やニカラガといった広大な周辺地域に発見された場合，編年上の問題はおこる

としても，それを単なる文化の地方性といったレベルで解決することはできないのではなかろうか。このような意味でマヤ周辺地域の石彫品は，マヤの石彫品がそうであるように，マヤ文明の本質を究明するための一つの手がかりともなり得るといえよう。テワンテペック地峡帯から南へパナマ地峡部を通って，恐らく北から南へ，南から北への文化的交流があったと想像されている。この想像は，必らずしも根拠のないものではないことは最近の考古学上の事実が多くの証拠を提供している。マヤ文明は，独自の文化圏を形成したが，同時に多くの影響を周辺地域に及ぼした。そして，その影響をうけた地域がさらに南米への影響を及ぼし，同時に南米からの影響をうけたのではないかと解釈されるわけである。この意味で非マヤ的石彫の南米への系譜を探ることは故なきことではない。

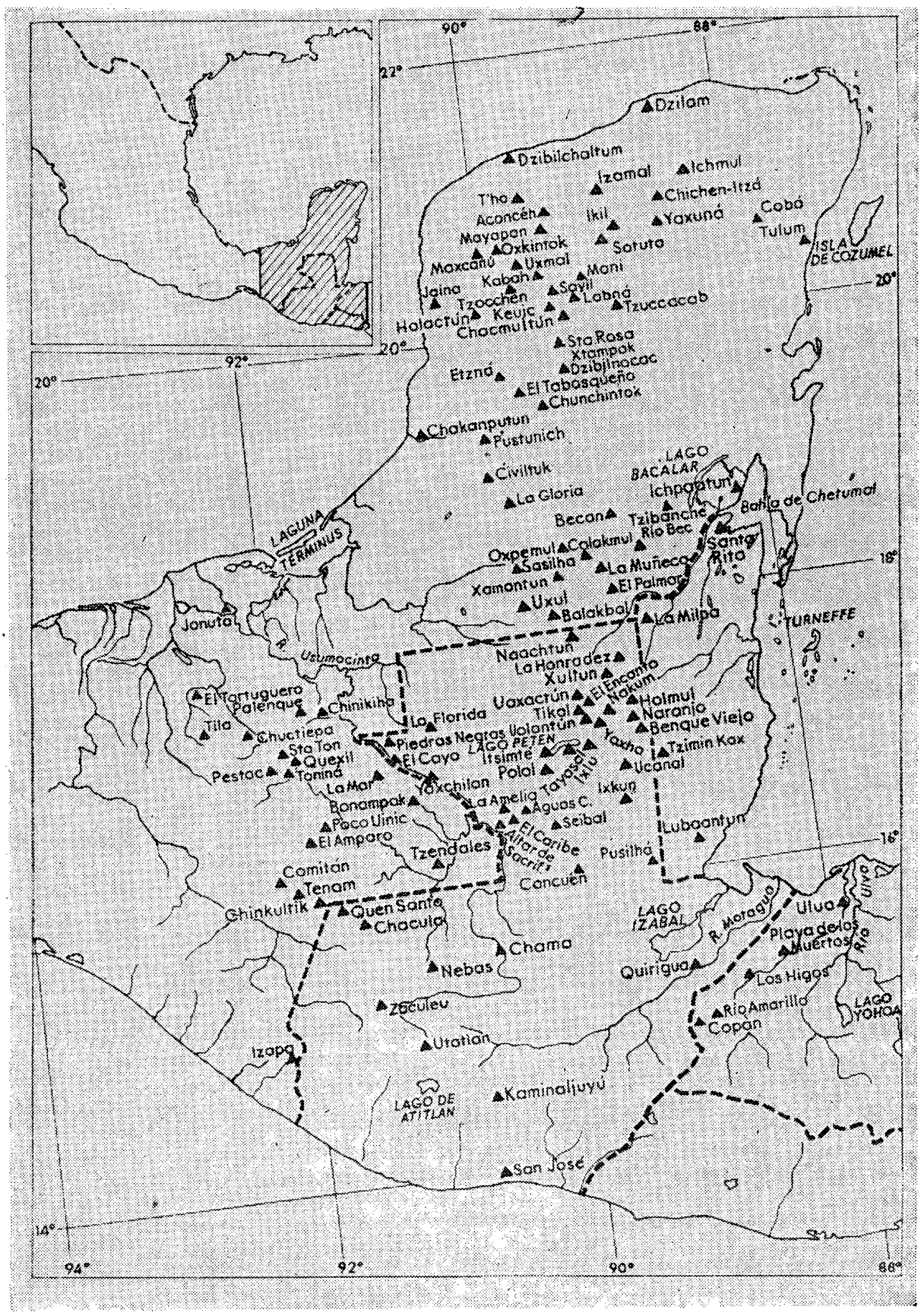
本論述は，以上のような問題点をふまえた上での一つの試論である。論述内容には限られた紙数では述べきれない問題もあるし，疑問になる点も多々あるが，将来での問題解明の一助としたい。

なお本稿を草するにあたって，エクアドル国立中央大学，E．アンドラーデ博士，同 M. K. サンチアナ教授，同国民族学会員，J. ヴィッテリー氏，パナマ国立博物館 G. C. de ブリスエラ女史に多くの御教示を受けた。紙上をかりて厚くお礼を申し上げる次第である。

2.　マヤ石造彫刻品の特質について

マヤの石造彫刻品には多くの種類がある。モノシリックな石碑彫刻（PL. 1.-a, b, c），楣石（PL. 1-g），彫像（一個の石で一つの彫刻像を作出したもの）（PL. 1-d），厳密には石彫とはいえないが，巨石の表面に漆喰で浮彫状の描出を行なったもの，特に石造建造物の表面装飾に利用される石彫品で，個々の小ブロックの彫刻を組み立てて一個の大きな彫刻品としたもの，硬玉や蛇紋岩系の貴石及び大理石を利用して小形の神像やペンダントなどの装飾品，石製容器を彫刻して作出したものなど，素材及び使用目的によって石彫品も多種類にわたっている。ここでは，モノリシックな石碑，楣石，彫像をとらえてみたい。というの

マヤ地域とマヤ都市遺跡図



は，これら三者は，マヤ文明で編年的な意味をもつ資料であり，特に様式や技法上の面で問題になる点が多いからである。

石碑及び楣石彫刻は，同じ手法が看取されるが，彫像は，これら二者とは異なった手法で製作されている。

石碑，楣石は，切り出された巨石ブロックを角柱または平板石状に整形し，これに彫刻を行なうものである。両者とも浮彫をともなうもので，石碑の場合は角柱形のブロックの各四面，表裏二面，表面一面に浮彫がほどこされる三様式があり，楣石の場合は，表面にのみ浮彫がほどこされる。これは，前者がピラミッド神殿の正面や，広場の中央に立てられ，日付をもって，その都市の建設年代やマヤ文明の出発点からの時の経過を示す記念碑的意味をもったのに対して，後者は，楣石であるため，出入口の上鴨居におかれ建造物自体への装飾的な意味をもたせた結果であると考えられる。彫像は，巨石ブロックを単独の神像，祭壇，または石造建築物の柱などに成形したものである。マヤの石彫品は，ほとんどのものが巨石を利用し，その表面に浮彫，高浮彫による彫刻をほどこしたものが多く，彫像は浮彫をもつ石彫品にくらべると，出土地点も時代もごく限られたもので，ほとんど製作されなかった。

マヤの石彫品の素材として，石灰岩，軟，硬砂岩，安山岩，玄武岩などの豊富な石材が使用されているが，新大陸，プレ＝コロンビアンの石彫品がそうであるように，マヤ地域においても石造彫刻に使用された道具は，石製の鑿と石槌であった[2)]。新大陸においては，石材を加工し得るだけの硬度をもつ金属である鉄は，スペインの侵入以前には知られていない。従って，マヤの石彫品の多くが鉄にかわり得る石彫具をもって彫刻されたことは議論の余地がなく，閃緑岩，玄武岩などの硬度の高い石で作られた石彫具が使用されたと考えられる。恐らく石材の切り出しにも，この種の石鑿が使用され，キリグァ(Quiriguá)の石碑 D (PL. 1-a)，Eの如く，長さ10m，重さ50tもの石材が長年月をかけて切り出され，彫刻された[3)]。しかし，巨石の建立技術は別としても表面の浮彫には，マヤ的ともいえる独自な手法があった。これは石彫具からの制約かもわからないが，石材の搬入が行なわれた後，石材は表面をかなり粗い石で磨

研され，平滑にされた後，木炭によって最終的な研磨が行なわれた[4]。この研磨面に浮彫される像の基本線が引かれ，基本線にそって斜めの彫り込みが開始され，浮彫の基本像が凸部として研磨面上に残されていくわけである。しかし，この場合全面を彫刻面とするのではなく，石材の形に応じた一定の幅の無彫刻帯が残され，これが外枠を形どるわけである。つまり，外枠を残した範囲の中で第一次の基本線が引かれ浮彫が行なわれるのである。このような例は，マヤの日付をもつ石碑のみならず，多くの楣石彫刻にも適用されており，一つの流行のような趣きを呈しているが，細部については，この外枠に象形文字を入れる場合，例えばチンクルテック（Chinkultik）遺跡，トニナ（Tonina）遺跡の球戯場（ボール・コート）の標識石彫（PL. 1-f），ピエドラス＝ネグラス（Piedras Negras）の石碑6などをあげることができる。しかし，原則的には外枠は無加工であり，同一遺跡の中で，両者が併存している場合もあるが，おおむね古典期のうちでも古い時期に属する石彫には，無加工の例が多い。例えば，テナム（Tenam）遺跡の石碑，ティカル（Tikal）遺跡の石碑16（PL. 1-b）セイバル（Seibal）遺跡の石碑10[5]，スルトゥウン（Xultun）遺跡の石碑10などである。しかし，コパン（Copan）のようなマヤ古典期のアクロポリス的都市では，必らずしもこの手法は実行されなかった。コパンの石碑Hは，マヤの他の遺跡の石碑とは，違った趣きをもっている。マヤの石碑は，巨石ブロックを彫刻して，それ自体を一個の彫像とする例はほとんどないが，コパンの石碑Hは，それ自体を彫像に仕上げた数少ない例の一つである。角柱石の全面に高浮彫を行ない，神官の顔を表面の中央よりやや高所に配し，頭冠，衣服などの複雑な文様を浮彫したものである。従って，この場合には外枠を設けた浮彫が行なわれたのではなく，最初から彫像を製作する意図があったと考えられる[6][7]。

コパンの例のような例外は別としても，浮彫の細部の作出には，第一次基線にそって残された凸部に第二次の基線を引くことから開始されたようである。浮彫のモチーフは第一次基線でほぼ決定されており，浮彫される像の位置，顔の向き，脚の位置，足部の位置，日付をもつ象形文字の記載位置などは，第一

次作業のときにほとんどできあがっていたと考えられる。マヤの石碑・楣石の浮彫は，そのほとんどが神官，または首長と考えられる人物のプロフイルを主体とするものであるが，キリグア，ピエドラス＝ネグラス(Piedras Negras)，コパンなどには，古典期のある時期に正面向，高浮彫の座像神官像を彫刻した例がある。浮彫が高浮彫であるか薄浮彫であるかにかかわらず，前述の如く第二次の細部作出のための彫刻は，第一次作業によって作出された凸部に対して行なわれた。細部の作出は，第二次基線にそって彫刻溝の深浅でコントラストをつけ，細部を明瞭に描き出していく方法がとられた。例えば，神官の頭冠，衣装，錫杖，足飾り，などが細かく浮彫されていくわけであるが，マヤは，第二次の細部作出後に，ほとんどの浮彫を彩色したようである[8]。色は，赤褐色が主で白色，黄色も散見されるが，コパンやキリグアの例では高浮彫の神官の顔だけには彩色せずに他のすべてを塗色した例がある。彩色は，数度行なわれたと考えられており，浮彫の細部は，さらに色によって強調されたが，塗付された顔料は長年月にはげおち，彩色例は現在わずかな例しか見ることはできない[9]。

次に彫像は，コパンにその多くの例証がある。特にトーモロコシの神像と考えられている一枚岩の彫像は，頭部の作出に特徴があり，異様に長い頭部とアーモンド形の目，二，三条の石鑿の彫刻痕をもつ髪束を前額部から後頭部へ大胆にオールバックさせたものである。この神像は，いわばコパン式とも考えられるマヤの彫像であるが，このような彫像自身が信仰の対象物であったか否かは別として，同一様式の神像がコパンの地だけに集中している点は注目される。これら神像の多くは，「象形文字の階段をもつ神殿」の主階段の中心線上に上から下へ数個にわたって安置されたが，「彫刻のある出入口をもつ神殿」の外壁を飾ったものもあったようである（PL. 1-d)。また彫像彫刻の範疇にはいると考えられる巨石を用いた石造建造物の入口の柱は，特にチチェン=イッツア（Chichén Itzá）のトルテカ侵入時に支配的になる蛇の逆立柱にそのよい例を見ることができる。チチェン=イッツアのこの例は，少なくとも様式論的には，メキシコ的マヤといわれる一時期に特に盛行する彫刻様式であるため，

マヤ式彫刻様式とトルテカ様式[10]との混淆したもので時代的にも特別な一時期をなすものであろう。例えば，「勇士の神殿」や「豹の神殿」の入口の蛇の逆立柱や主ピラミッド（カステイヨ Castillo）の主階段の欄杆部の蛇の逆立様式などにその例をみることができよう（PL, 2-m)[11][12]。

以上のようなマヤの石碑や楣石に示される特異な彫刻技法は，どのような様式的変化をもっていたかが次に考えられねばならない。

マヤ石彫品の主要なものは，そのほとんどが古典期に製作された。しかし，前にも少しふれたようにユカタンへのトルテカの侵入時には，トウーラ(Tula)からトルテカ的石彫の典型的な技法がユカタンへ移植され，前述のトルテカ=マヤ様式をうみ出した。そして「翼のある蛇」(ケッツァルコアトル Quetzalcoátl)の逆立柱やチャック=モル（Chac mool）などのマヤ石彫様式に今までまったく知られなかった新様式がはいってきているのである（PL. 1-e)。しかも建築技術とも関連して，トルテカ的様式は，チチェン=イッツアに新しい一時代を築いたのである。しかし，マヤ地域における彫刻芸術の歴史には，ほぼ A. D. 328-889 年という約5世紀半に及ぶ時の流れがあった。そして，この時の経過のうちに，五つの発展段階があったと考えられる[13]。

第一の段階は，4～5 世紀に製作されたもので，浮彫に神官像などの人物を主体にした像が頻出する時期である。像はなお生硬で，特に足部の配置に特色がある。つまり，神官像のプロフイルが浮彫の主題となっているが，足部は，エジプト彫刻のプロフイルと同じく，一つが他の前に置かれるか，両者がわずかにずれた形で同一方向を向いた配置になっている。像そのものは，まだ粗雑な感をうけるが特に頭冠の装飾が入念に浮彫され，神官の頭部は羽毛や冠の装飾品でおおわれるモチーフが多い。この段階では，まだ石彫品は純粋にマヤ的手法をもったものといえなく，マヤ以外の彫刻様式と多くの関連をもっている。第二段階は，6～7 世紀を中心とする時期であり，基本的にはマヤ式彫刻が形成された段階と考えることができる。しかし，この段階に相応する石彫品の例はとぼしく，不明な点が多い。第三段階は，8 世紀の前半を中心とする時期で，この約半世紀の間にマヤの石彫は，一つの完成の域に達したと考えられる。第

三段階は，次の第四段階への重要な基盤となった。つまり，マヤ的石彫の完成とも考えられる多くの秀れた作品が製作されているが，例えばコパンの石碑H，キリグアの石碑DとFなどは，その代表的なものとしてあげることができよう。いずれも8世紀前半に製作されたと考えられる日付をもつものであり，それぞれのマヤ都市における編年上重要な資料である。次に第四段階は，8世紀後半頃に製作された一群の石彫品をさす。特にプロスコウリアコフ(Proskouriakoff)が「躍動期」と名付けた一時期は，この第四段階に相当するもので，浮彫の線は生き生きと描かれ，彫刻全体が一つのリズムのもとに躍動しているような活動と自信にあふれた時期であったと考えられ，彫刻の線は，流動的な曲線が主体的にとり入れられた段階である。ただ，この時期では彫刻の構図のとり方に幾分シンメトリカルな面が表れ，特に浮彫では構図の複雑さが極立ってくるようである。つまり，マヤ式彫刻の技法が完成の域に達し，芸術的な新しい分野への模索が見られる時期でもある。例えば，ピエドラス=ネグラスの石碑12は，マヤ石碑浮彫の最高傑作と呼ばれているものであるが[14]，高さ約3m，幅約1m，厚さ約45cm重さ約4tの黄色味がかった石灰岩の表面に日付をもつ象形文字と浮彫が施こされている。浮彫は，恐らくピエドラス=ネグラスのかつての支配者であった人物（神官か王かは不明）を石碑の上辺部に浮彫しているが，彼は右手に錫杖をもち，足下に座らされ，縄でしばられた捕虜達の裸像を眺め下している構図である（PL. 1-c)。このような人物集団を構図の主要主題にするやり方は，マヤ彫刻が「躍動期」にはいった8世紀後半頃の特長であり，ピエドラス＝ネグラスの楣石1（PL. 1-g)，3にも見られるところである。古典期初期，特に石彫発展段階の第二，第三段階に相当する時期に頻繁に見られた単人像（それが神官像であれ，首長像であれ）のモチーフは，この段階で大きく発展したことを物語っていると考えてもよかろう。マヤの石彫は「躍動期」を経て第五段階である衰退期にはいる。この時期は，古典期の最終末期にも相当するが，建築様式の変化とも密接な関係をもつものである。年代的にはほぼ9世紀頃と考えてもいいが，建築様式は一変し，いわゆるプウウック（Púuc）様式といわれる建築様式が盛行するようになる時期である。プ

ウウック様式は，マヤの建築様式上の概念であるが，リオ＝ベック（Rio Bec）やチエネス（Chénes），ウシュマル（Uxmal），カバー（Kabah），サイル（Zayil）などの建造物に典型的なその例証を見ることができる。プウウック様式は，地方的な特性を一面ではもっているが，ユタカン半島の北部からその中心部付近まで広くこの様式が浸透し，建造物の表面の長押の部分がひじように豊富な装飾をもって飾られてくるようになる。特に，チャーク（Chac）神の顔をもって建物の表面を飾るやり方は，チャーク神の特異な風貌とともに，この様式にのみ認められる一つの特性でもある。チャークはもともと大地の神，雨の神を意味したと解されているが，前段階までのモノリシックな石彫品は次第に姿を消し，今迄の建造物の表面上の平滑さは失われて，単位彫刻石を複雑に組合わせて一つの主題を作りあげ，それが同時に建造物の表面を飾る装飾ともなる手法が実行されてくる。この場合単位彫刻石は極めて小さくなり，約15cmの一辺をもつ方形の平石，50cmぐらいの足をもち一面が約20cmぐらいの正方形に整形された単位石材に，組合わせの単位彫刻がなされるもの，直径約10cm内外の半円柱状の羽目に使用される丸柱など，そのモチーフも区々である。従って，モニュメンタルなものや巨石石碑といったモノリシックな彫刻品は，石造建造物の長押の組合わせ彫刻に圧倒されてしまって作られなくなる。単位彫刻が小さくなったことは，同時に石造建築の表面装飾を幾何学的文様，抽象的な意匠をシンメトリカルに組みかえてしまう傾向をもってくる。チャーク神の長い鼻をもつグロテスクな顔は，建物の正面の入口両側に配され，チャーク神の顔以外の部分には，×印の連続文や雷文が単位石彫の組合わせで装飾される例が多く認められる。プウウック様式は，前記の諸都市にも見られるが，典型的にそれが発展したのは，リオ=ベックであった。リオ=ベックでは，従来のマヤの石造建築に見られない新しいプランをもつ建築が作られた。それは建造物の正面の両側に塔を配し，中央部にも両側の塔よりやや低い塔を構築するものである。マヤ建築における三層の円形塔や三層の方形塔は，チチェン=イッツアやパレンケ（Palenque）に見られる所であるが，前者が天文観測台として利用され，塔の中心部に螺旋階段をもつものであり，後者は宮殿建築の中庭に建て

られた塔である。いずれも塔自体が独自の機能をもつ独立建造物である。しかし，リオ=ベックの塔は建造物の正面の一部を形成し，建物の正面の装飾となるとともに従来のマヤ建築様式を大きく変えて建てられているところに特色をもっている。しかも両塔の先端部にはチャーク神の顔を配し，その上にマヤ式神殿建築に古くから見られる「屋根の宝冠」といわれる装飾部が置かれている。建築様式的には，明らかにマヤ建築の古い習慣を一部に残し，全体的な面では新様式の建築を行っている[15)]。

以上のようにマヤ地域内のマヤ様式をもつ石彫，特に石碑，楣石，彫像などには五段階の発展が認められ，独自の手法が看取されるが，これら石彫はマヤ文明の要素とも有機的に関連するものである。大きくはマヤ都市建築のグランドプラン，石造建造物の配置，細かくは象形文字の碑文，建造物自体の構造様式とも深い関係をもって石彫が製作されていることを知ることができる。

しかし，マヤ地域の周辺にもモニュメンタルな石彫品の多くが知られている。これら石彫品のもつ意味は，前述の如きマヤ石彫品の特質を直接的に受けついだものでもなく，マヤ的石彫とは異なった様式をもつものもある。しかし，これら周辺地域のモニュメンタルな石彫の多くは，ある意味でかなり注意すべき問題をふくんでいる。即ちマヤという高文明の周辺地域に形成されたある文化の地理的な領域やそれら相互間の編年関係を明確にするものであり，同時にマヤ文明との関係をとく一つの重要な手がかりともなるものであろう。従って，次にマヤ周辺地域のモニュメンタルな石彫品についての問題を考えてみたい。

3.　マヤ地域周辺地帯の石造彫刻品の諸問題

マヤ地域に隣接する地帯で，特に石彫に関して問題になる地帯は，メキシコ南部オハカ地方，ガテマラ低，高地帯，エル＝サルバドル，ニカラガ，コスタリカ，中央パナマの諸地帯である。これら中央アメリカ諸地帯の考古学的調査は十分に行なわれているわけでなく資料的にも制約があり，今までに発見された資料についての報告や報告書も不十分なために編年に関しても多くの疑問が

残されている。しかし，現在までに知られる資料を基礎にして，これら地域の非マヤ的石彫を考察した場合一つの問題が提起されるようである。記述の便宜上周辺地域毎に，その問題点を述べてみたい。

〔1〕 メキシコ，オハカ地方

メキシコのテワンテペック地峡帯に接するオハカ地方は，マヤ地域にも隣接する地帯でありモンテ=アルバン(Monte Alban) を代表遺跡とするミシュテカ文化の根拠地でもある。古くから考古学的にも多くの問題があったが，ハミルテペック (Jamiltepec) とピエドラ=パラーダ (Piedra Parada) の両地点に1個の彫像と6個の石碑が発見されている[16]。彫像は玄武岩製で高さ1.7mの人間像であるが，顔面に強いオルメカの特長が看取されるものである。オルメカ様式の彫像は，この地域のみならず隣接するガテマラにも発見されているが，オルメカ文化の伝播の経路を知るうえの重要な遺跡である。また，ピエドラ=パラーダにも高さ約10mのマウンド，モンティクロ I, II が発見され，その前面に6本の石碑が立てられていた。これら石碑は，高さ2m，幅50cm，厚さ50cmを最大なものとし，高さ60cm，幅10cm，厚さ5cmを最少のものとする寸法に種々な変化のあるものであるが，マウンドの正面に立てられている様は，マヤの神殿の前に立てられている石碑と同一手法をもつものである。しかし，これらオハカ地方のモニュメントは，ほとんどその意味は不明である。ピエドラ=パラーダのマウンドは未発掘であり何時代のものか，その遺構が神殿か否かも不明で，マヤ式のグランドプランをもつものであると想像されても正確なことはわからない。しかし，マヤ地域と境を接するこの地域が，マヤ文明の強い影響をうけたことは，モンテ=アルバンの例を見てもわかるように，マヤの都市に多くの石碑が立てられた頃，いわば8世紀前半頃のものではないかと想像されるのである。この意味でオルメカ文化とマヤ文化との影響下にオハカの石彫は生まれたものであり，今後の調査結果の如何によっては，マヤの石彫問題にユニークな資料を提供することになろう。

〔2〕 ガテマラの非マヤ的石彫

ガテマラの太平洋岸低地帯と高地帯西斜面における考古学上の遺物は，古く

からナウワ語族のピピル（Pipil）族のものであるといわれてきた。しかし，その後の研究によって，この地域にピピル族が移動してくる以前にはマヤ，イコマギ（Ikomagi）族が先住してたことが知られるようになり，これらの地域から出土した石彫品についても再考されるようになった[17]。この地域には，特に三つに分類される石彫品の様式がある。それは，(1)巨石人頭像，(2)足を組んで座わる（あぐら式のもの）か正座するかの粗けずりの人像彫刻，(3)平石の表面にのみ薄浮彫をもつ石彫の三者である。これら三者のうちで，(1)の巨石人頭像は明かにラ=ベンタ（La Venta），トレス=サポテス（Tres-Zapotes）のオルメカ様式をもつ石彫で，特に大西洋岸サン=ロレンソ（San Lorenzo）の巨石人頭像式のものに極似している。しかし，これら人頭像のうちモンテ=アルト（Monte Alto）出土のものは，はるかにマヤ式彫刻の特長をそなえたもので，オルメカ様式とは考えられない性質のものである[18]。特に，マヤ地域の中心部であるユカタンのペテン地帯のマヤ最古のピラミッド神殿といわれるウァシャクトウウン（Uaxactun）の E VII sub. 遺構の表面に作出された彫刻と表現，表情ともに同一である。E VII sub. 遺構は，5世紀中頃のものであり，その遺構の表面彫刻と同一様式が，ペテンよりはるか南西のガテマラ太平洋岸に存するということは，ひじょうに意味深いことである。つまり，マヤ文明が形成された初期の頃には既にその文明を誕生せしめた母体がマヤ地域に広く存在していたのではないかということである。それは，オルメカ的様式によって代表される石造様式を基礎とし，オルメカ文化の強い影響のもとに誕生したものであったと考えられるが，これからマヤ的なものが派生しマヤ文明の中心地域では，いわゆるマヤ様式といったものへ発展していった。しかし，マヤ地域の中心からはずれる地域では，マヤ文明プロパーとは異なった様式の発展をみせたのではなかろうか。従って上記のガテマラの例は，明らかにマヤ文明の基礎となった要素が，中心地域とほぼ同時代的に残ったものと考えられるのである。次に(2)の人像彫刻に関してはマヤ文明の要素と関連して問題になる点がある。ガテマラのコスマルガパ（Cotzumalguapa）の人像彫刻の中に頭部中央部に一つの凸出部をもち，頸部に三角形の点をネックレース状に彫刻したものが発見された

(PL. 2-j)[19)20)]。この石彫自体は明らかにオルメカ様式の石彫であるが，頭部の凸帯はマヤの「トーモロコシ神」の頭髪の要素であり三角形のネックレースは同じく「土地の神」の特長である。オルメカ式石彫の中にマヤの神の要素が表現され，二重機能をもつ若い神の姿として表現されている点は注意されなければならない。つまり，マヤ文明の影響はマヤ周辺地域の古い地方文化に及び，マヤの神その他の要素の一部がデフォルメされた形で表現され，継続していったと考えることができよう。また，ガテマラ高地のカミナルフユ (Kaminaljuyú) 遺跡からは，マヤ地域との関係で問題になる石彫品が発見されている。同遺跡の石彫品は粗製石彫品，早期マヤ石彫品，後期マヤ石彫品の三つのグループに大別されるが，この中で粗製石彫品は，コパンの石碑5と4の基底部に発見された石彫品 (PL. 2-i) と極めて類似し，両者間の相関関係を否定することはできない。しかも，コパン遺跡のこの粗製石彫品は早期土器と供伴しているところから，早期マヤ石彫品及び後期マヤ石彫品の出現以前のものと考えることができる。このことは，マヤ地域周辺には，少なくともマヤ石彫出現以前に広範囲な粗製石彫文化の基盤があったと考えても差支えない。さらにコパン発見の前述の粗製石彫品は，ニカラガ発見のチョロテガ族の石彫品と様式的に類似しているという事実があり，このことからもマヤ周辺地域での基盤的な石彫文化の広がりは，更に南に広がる傾向をもつと考えてもよかろう。

〔3〕 エル=サルバドルの石彫品

サルバドルのサンタ=アナ (Santa Ana)，アウアチャパン (Ahuachapan)，カラ=スシア (Cara Sucia)，エル=リモン (El Limón) などからは，この地域独得なアメリカ豹の頭像が発見されている。獣頭像は，いずれも球体状の石に彫刻されるか，円盤状の石の表面に高浮彫か薄浮彫で彫刻されたもので，ガテマラのモンテ=アルト出土のアメリカ豹頭像と同様式のものである[21)]。サルバドルの例はガテマラ太平洋岸低地出土の頭像より小さなものであっても，両者間に文化的な密接な関係があったことを示しており，さらにカミナルフユ出土の粗製石彫品との類似が問題になるものである。このことは，少なくともガテマラのサンタ=ルシア=コズマルウアパ (Santa Lucia Cozumalhuapa) の浮彫像の製

作時とほぼ同時期に，これら獣頭像が製作されたことを示していると解することができよう。

獣頭像とならんで問題になるのは「チャック=モル(Chac mool)像」(PL. 1.-e参照）と「荷物運搬人像」の存在である。両者はともにメキシコ中央部から移入された文化要素であり，マヤ地域のチチェン=イッツアにおいても発見された。マヤ地域内での出現は，時期的にはトルテカ侵入時に符合し，メキシコ様式がマヤ様式と混合し，メキシコ=マヤという特質を発揮した時期であることは，既に述べたところである。しかし，このような彫刻様式の分布範囲は，中央メキシコからコスタリカの中央部までに及びガテマラのキリグア，ホンデュラスのアマトラン（Amatlan)，サルバドルのタズマル(Tazumal)，ニカラガのレオン(León)，コスタリカのラス=メルセデス（Las Mercedes）で発見されている。このことは，文化的様式が分布することと種族の居住する領域との間には必らずしも同一性がなく，異なった種族の領域内にも一つの共通の文化的パターンが広がり得ることを示している。

〔4〕 ニカラガの石彫品

ニカラガの考古学的遺物で資料的価値をもつものは石彫品と土器であるが，これらはほとんどマナグア湖とニカラガ湖周辺及びこの二つの湖と太平洋岸との間の狭い長い回廊状の地域に集中的に発見されている。

ニカラガの石彫の最大の特色は，それらが二つのグループに大別できることである。一つは動物か爬虫類像と人間像が結合したもの，他は人間像のみのものである。前者には三様式があり，第一様式は，動物か爬虫類像が人間像の肩か背中に後からかけられたような形になるもの，第二様式は人間像の頭部にのせられる場合，第三様式は人間の頭部が大きく広げられた動物の口の中からのぞいているような形式のものである。いわゆる「アルター=エゴ」様式といわれる一群である[22]。また，動物，爬虫類像をともなわない人間像は，裸像が主で柱状の石の頂部の座像が立像で彫刻されている。しかも，これら人間像の頸部には装飾品が下げられ，手にも同様に装飾品が保持されている。

中米のモニュメンタルな石彫が建造物と深い関係をもって立てられていると

いう特長は，ニカラガの石彫の場合にも例外ではなく，建造物の前面にこのような石彫が発見されている。ニカラガの石彫に類似した石彫品は，メキシコのコミタン (Comitan)，ホンデュラスのラ=フロリダ (La Florida)，ウルア谷 (Ulua Valley)，オコテペケ (Ocotepeque)，コスタリカのナカソラ (Nacasola) などに発見されている[23]。もとより中米の広範囲な地域に散在するこのような個々の類似した発見物だけでニカラガ石彫の分布圏や相互の編年的推測を行なうのは危険なことであるが，ホンデュラスのラ=フロリダの例は，ニカラガとマヤ地域との関係において多くの問題を提起するものである。

ラ=フロリダの例は，台座上の人間座像であるが，この人間像の背には動物がおぶさった形になっている。頭部の一部が欠損しているために正確にはわからないが，この像は前述の第三様式の石彫と考えられている。もしそうだとすれば，ニカラガ彫刻の特質がホンデュラスに直接的に伝播したものと解釈することができ，同時にマヤ地域，特にチチェン=イッツアの彫刻様式とも関係をもつものである。動物の口の中に人頭像がおかれる手法は，トルテカ=マヤ様式に頻出する(PL. 1-h)。ラースラップは，ニカラガの例でマヤ地域とニカラガの直接的な関係を推論したことがあったが[24]，もちろん多くの問題が残っている。それは，ニカラガの例に見られるような南方的彫刻要素（中米における南の要素という意味）が北方へ侵入していった時期はいつか，という問題とともに前述コパンの石碑4の基底部から発見された石彫とこれがいかなる関係をもつかといった問題などである。コパンの例は多くの点でニカラガ，ラ=フロリダのものと類似している。しかし，アルター=エゴ (Alter ego) のモチーフは，ラ=フロリダ，ニカラガに共通した特質であるが，コパンの例はアルター=エゴとは認められないのである。また，コパンの例は柱状石の頂部や台座上の座像といったものではなく，丸石の彫像である。このような丸石を直接彫刻した例は，ニカラガからは発見されていない。つまり，彫刻の手法や様式には両者間に大きな相異が認められ，コパンの例は前述の如くガテマラの粗製石彫品との関係を考えるべきものであろう[25]。コパンの例をニカラガやホンデュラスの例からはなれて考えたとき，それはマヤ地域内で典型的なマヤ様式の石彫がおこ

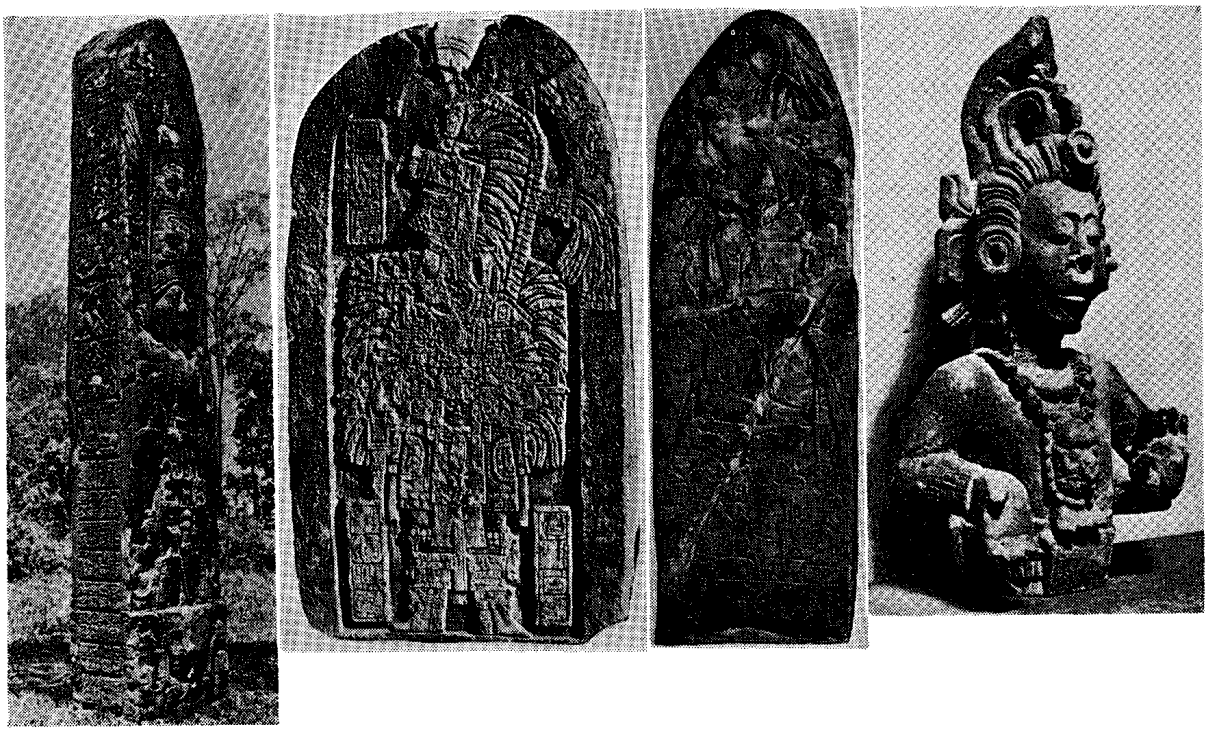
る以前の早期のホライズンを形成した一つの彫刻様式ではなかったろうか，それともコパン谷でのまったく独自的な地方性を示す彫刻であったのか，と多くの疑問があるが，南との関連よりは，北との関係において考えるほうが正当であろう。

ニカラガの石彫に関して，さらに問題になる一つの様式がある。それは，チョンタレス（Chontales）州を中心として，マナグア湖，ニカラガ湖の東側につらなるシエラ=アメリク山塊の長い西斜面にそって特異な石彫品が散在していることである。

チョンタレス州の石彫品は，円柱形の巨石柱の表面に薄浮彫で人像が彫刻されているものである。浮彫された人像は，ひじょうに明瞭な様式をもち腕は胴部をとりまき，右腕が左腕の上位におかれ，足は折りまげられているのがふつうである（PL. 2-n)。腕や足の表面にはS字文その他の装飾が施されるのが多く，手にはほとんどのものが笏状の用具，棒（指揮棒の如きもの)，槍などをもっていて，この地域の石彫の特長を示している。また，頭部は一本ないし二本の凸帯で表わされ，その上に動物が彫られている。頸部はネックレース状の飾りが下げられ，その垂飾の中心部が，手にもった笏状の用具その他と連結しているのが普通である。

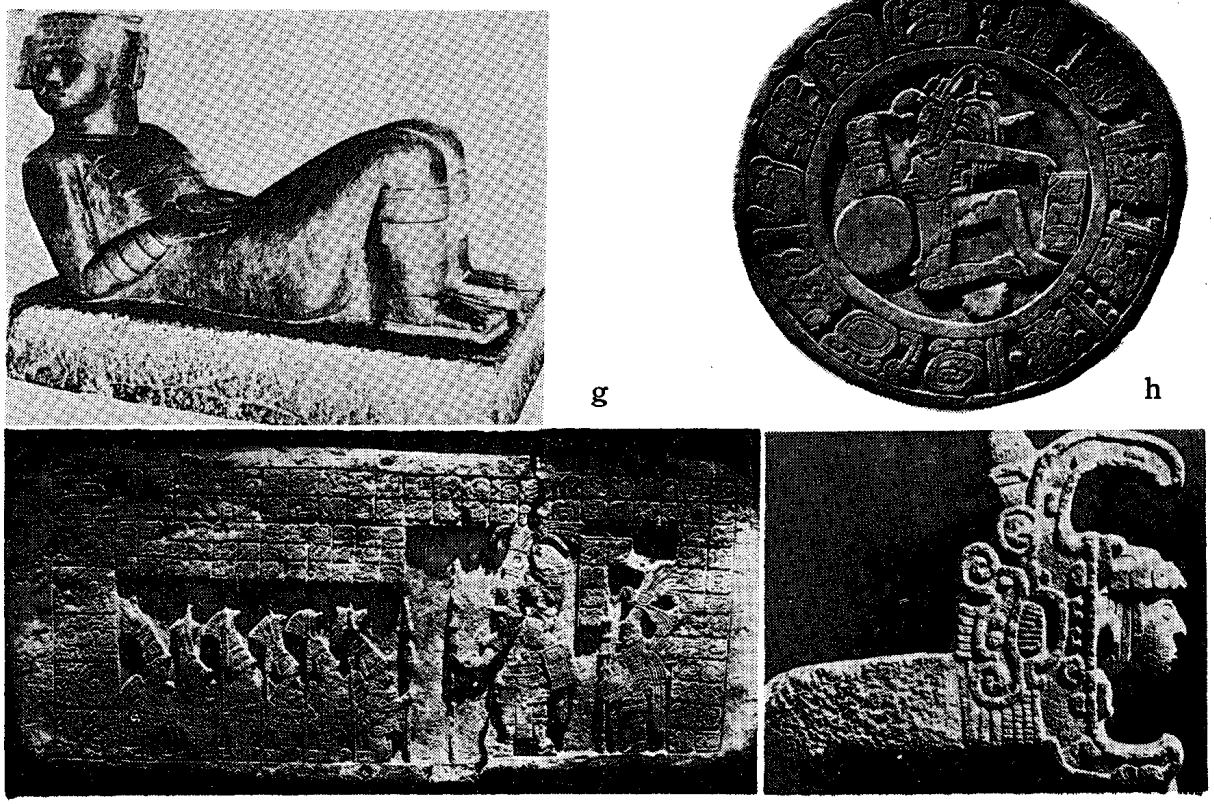
チョンタレス地方のこの種石彫は，いわゆるアルター=エゴのモチーフであるが，前述のニカラガ，ホンデュラス出土の例とは異った点が注目される。ニカラガ発見のアルター=エゴの第二様式の場合は，動物の頭部だけがのせられており，その大きさは人頭像と同じくらいか，むしろ大きいかのどちらかである。そして応々にしてそれは人頭像より前方に凸出した傾向をもっているが，チョンタレスのものは，このような特長はない。従って，チョンタレス地方のアルター=エゴモチーフは，中米でも稀に見る特異な存在であると考えられる。しかし，これと同様式のものは，コスタリカにも発見されており，それは刻線で点や菱形文，雷文などを胴部に彫刻しているが，様式的にはチョンタレスと類似している[26]。チョンタレス式石彫の類例はニカラガより北には発見されていない。従って，これら石彫の系譜はむしろ南の方向に求められなければなら

a b c d



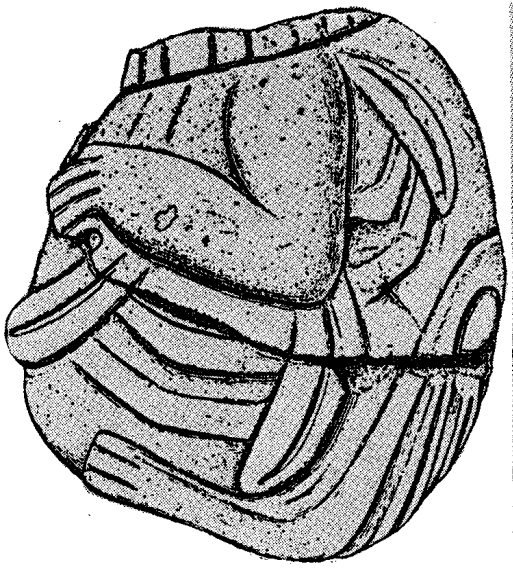
PL. 1. a. キリグア石碑 D. b. ティカル石碑 16. c. ピエドラス=ネグラス石碑 12. d. コパンのトーモロコシ神。 e. チャック=モル像。 f. チンクルテック石碑。 g. ピエドラス=ネグラスの楣石 1. h. チチェン=イッツアの石彫。

e f



g h

i



j

k

PL. 2. i. コパンの石彫。　j. コスマルガパの石彫。
k. コスタリカの石彫。　l. サン=アグスチンの石彫。
m. 勇士の神殿の蛇の逆立柱。n. チョンタレス式石彫。

n

m

l

ないものと考えられる。

〔5〕 コスタリカ，パナマの石彫

コスタリカのニコヤ（Nicoya）地方には，多くの貝塚や墳墓が発見され，ニコヤ式石臼，石杵とならんでアルター=エゴモチーフの石彫も発見されている。特に，ケブラーダ=グランデ（Quebrada Grande）とナカスコロ（Nacascolo）からは，二様式のアルター=エゴ石彫が発見された。前者の石彫は，チョンタレス式のものであり，後者の石彫は，いわゆるアルター=エゴ様式といわれるものである。ケブラーダ=グランデのものは，円柱石の表面に浮彫で人面を表わしているが，頭部はチョンタレス式と同様一本の凸帯で区画され，その上に小動物群を彫刻したもので，手と足は描出されていない。胴部には螺旋文や胸部中部に太陽文が描かれ，目が胸部太陽文と同一手法で線刻されたユニークなものである（PL. 2-k)。ナカスコロ出土のものは，爬虫類の頭部を人頭像上にのせるもので，ひじょうにリアルな裸の人間像が爬虫類の胴部に彫刻されたものである。これは，前述ニカラガの第三様式と同一のものと考えることができ，コスタリカ発見のアルター=エゴ様式の石彫品中特異な存在である[27)28)]。

コスタリカのニコヤ地方におけるこれら二様式の石彫は，細部においては多少の相異が認められるが，ニカラガの例とひじょうによく符合し，ニカラガでの二様式，コスタリカ内での二様式の存在は，両者間の密接な文化的関係を物語っているといえよう。

また，パナマのコクレ（Coclé）のリオ=カーニョ（Rio Caño）出土の例は，チョンタレス式と考えられる石彫であるが，パナマ地域における石彫は，1920年代以降，30年代発見のもの以外は資料がないようである[29)30)]。しかし，パナマ国立博物館所蔵の石彫品の中に，いわゆるアルター=エゴ様式とは異なった石彫品があった。これらは，1.5 m 内外の長さをもつ角柱石の表面に両手をさしあげた裸の人間像を高浮彫しこれを下段に配して，上段には同一モチーフの人間像及び手をさしあげない二人一組の人間像を二個配列したものである。これは，マウンドの正面に立てられたものであるが，中米ではこの種の石彫はなく，パナマ地域に独得なものと考えることができよう。また，同じ収蔵品の中

の他の一例は，高さ約2m，幅約30cm，厚さ25cmの玄武岩の角柱石の最上部に一個の人面を配するものである。人面は最上部から約30cm下に凸帯で区画された部分より上に高浮彫されているが，顔の輪郭だけが彫刻され顔面には目，口，耳などの表現はなく眼窩の部分と鼻梁とがT字形に彫刻されているだけである。この例は，明らかにガテマラ，ホンデュラスの角柱石の最上部に人間像や動物像を配置する石彫と同系列のものであるが，正式な報告書がない現在，両地域との関連性を指摘するにとどめたい[31]。

以上のようにマヤ地域以外の石彫品について述べたが，ニカラガのチョンタレス式石彫の要素は，北方的要素，つまりメキシコ的，マヤ的要素をもたず，むしろ南方的要素，つまり南米北西部の広大な地域に発見される石彫品との類似を強く認めることができるようである。特にコロンビアのサン=アグスチン(San Augustin)及びペルーのカエホン=デ=ワイラス(Callejón de Huailas)の石彫との類似を認めないわけにはいかない。ニカラガ以南の中米の石彫文化は，アンデス高地帯の石彫文化とある時期に深い関係をもったものと考えられる。従って，次に中米の石彫と南米の石彫文化との系譜を考えてみたい。

4. 中米の石造彫刻品の南米への系譜

資料的に制約があっても，チョンタレス式石彫は明らかにニカラガ以北の中米に見られる石彫の要素をもたないことは，前述の通りである。しかし，チョンタレス式石彫は，ニカラガの南，コスタリカに明らかに認められるところから，その系譜は北よりは南に求められるべきである。このような観点から南米アンデス地帯の石彫文化で，まず第一にとりあげられるべき文化は，コロンビアのサン=アグスチン文化であろう[32][33]。

サン=アグスチンは，北西アンデスにおける先史文化の中心であった。ここからは，マウンド，墳墓，石造神殿，巨石記念物など多くの考古学上の遺物，遺構が発見されている。その中でも石彫は，サン=アグスチン文化の代表的なもので，その主題は人間，かえる，爬虫類，動物などと多岐にわたっている。古典的な石彫は，線刻による人像彫刻であるが，人像はしばしば怪物化され，

自然石に直接彫刻されている場合が多い（PL. 2-1参照）。しかも人像は頭部が巨大化され，短身の遵踞姿勢や四肢の矮小化に特色をもつものである。また，このような半人半獣的彫刻は，頸部にネックレースその他の垂飾をつけ，口は上下の歯列を明確に現わし，犬歯の誇張が見られる。犬歯の表現は，石彫品のみならず壁画，土器文様にも認められるが，南米ではこれは猫科獣動物信仰の象徴であり，ペルーのチャヴィン=デ=ワンタル（Chavín de Huántar）のチャヴィン式猫科獣はその代表的な例である。サン=アグスチンの320個に及ぶモニュメンタルな石彫品の中には，アルター=エゴモチーフも多く認められる。アルター=エゴの存在が直接，中米チョンタレス式石彫との関係を証明するものではないにしても，同一様式が，中，南米に存在することは，もとより両者間に密接な文化的交渉のあったことを物語っている。ただ問題となるのは，猫科獣信仰の象徴とアルター=エゴ彫刻の編年的な位置関係である。サン=アグスチン石彫のアルター=エゴは，猫科獣信仰を示す石彫と密接に結合し，チョンタレス式石彫には，少なくとも猫科獣信仰の象徴を認めることはできない。例えば頸部のネックレースの垂飾，腕が胴をとりまいている手法，手にもった笏状用具その他の保持品といった基本的な石彫のモチーフが，サン=アグスチンの石彫では，目の表現が猫科獣のそれにかえられ，犬歯の表現が誇張されてくるのである。このような点からみれば，サン=アグスチンの石彫は，アンデス地帯石彫文化圏の最も重要な特質を備えており，当然，ペルーのチャヴィン文化との関係の上に成立したものであることが推定される。つまり，様式的な変化は，中米文化からの影響によったものであっても，本質的なものは，古くからの伝統の中で生きていると解さざるを得ない。

早期の中米文化が南米のエクアドル海岸やコロンビアのツマコ（Tumaco）に伝播した事実は最近の考古学調査が実証しているが[34)~37)]，中米文化の刺激によっておこった文化変容は，その後どのような形でアンデスにのぼり，そこに定着していったかが問題なのである。中米早期文化は，南米に猫科獣信仰の強い刺激を与えた。アンデス中，北部の石彫文化に見られる早期の中米文化の影響は否定することができないとすれば，サン=アグスチンの様式上の変化は，後

世の中米からの影響によるものとみたほうが正当であろう。換言すれば，早期中米文化の基盤の上に成立した南米海岸文化は，アンデスにのぼってサン=アグスチン文化の如き変容をとげ，その後，ペルーや中米の文化的影響をうけながら，いわゆるサン・アグスチン的文化，石彫を生み出していったと解したい。ペルーにおける文化編年に従って，古典チャヴィン文化は 1000～400 B.C. と考えれば，サン=アグスチン文化の始源は，少しく下がるようである。つまり編年的には両文化に相異があっても，アンデス地帯の猫科獣信仰の中核は，チャヴィン，サン=アグスチンにあったのである。そして紀元前1000年頃から始まった山岳地帯の神殿建築，石彫品は，その後，中米文化との接触を受け，ニカラガ，チョンタレス式石彫と同一手法の石彫をサン=アグスチンに生むようになったのであろう。

5. 結　　語

マヤ地域における石彫文化は，新大陸古代文明の一つの花とも考えられ，彫刻品のもつ意味はマヤ文明自体は勿論のこと，周辺地域にとっても重要な意味をもっている。しかし，非マヤ的石彫はマヤ文明成立の謎を解く一つの鍵を与えるものである。ガテマラやサルバドルの太平洋岸低地帯に発見される粗製石彫の多くは，マヤ文明の基盤を形成したものであったと推定しても，あながち間違いではなかろう。ワシャクトオウン E VII sub. の石彫との類例が，ガテマラに発見されたことは，E VII sub. をマヤ地域中心部の初期のピラミッドと考えればマヤ文明の成立に関する重要な問題をふくんだものと解さざるを得なくなるわけである。つまり，マヤ初期文化の形成には，広範囲な地域に広がった基盤的な文化要素が必要であり，それを母体として文化の誕生があったのであろう。

アルター=エゴ様式の石彫は，確に中米のマヤ地域以外に頻出する特異な石彫としての性格をもっている。ニカラガの石彫品は，この意味で重要である。チョンタレス式のアレター=エゴ石彫が北方的要素でなく，むしろ南方への系譜が考えられるものであり，北方的要素は，ニカラガを一つの限界点として消

滅していると考えると，ニカラガは文化伝播の一つの分岐点をなしていると解することができよう。メキシコ中央部からの文化は，ガテマラ，サルバドルの太平洋岸低地を通って南へ波及し，そして，それはマヤ地域の西側を通る時にマヤ地域と関連をもちながら南のニカラガまで達したと考えられる。ニカラガのチョンタレス地域には，ある意味で独立的な様式をもった石彫文化があり，これは，むしろ南への系譜をもつものであったのであろう。しかし，チョンタレス式石彫は，確にコスタリカ，パナマにその痕跡を示しているが，南から北への系譜は考えられないのであろうか。つまり，早期中米文化の波及によっておこったアンデスの石彫文化が，逆に南から北へと伝播したとは考えられないだろうか，という問題がおこってくる。チョンタレス式石彫は，マヤ地域との関連を見つけるにはあまりに特異であり独自的である。前述の如く南米のサン=アグスチンとの関連を考えるほうが正当であるとすれば，南から北への文化伝播の可能性もあり得るわけである。マヤ文明圏の壮大な力は，南から北への文化的波及に対して，一つの大きな壁であったと考えられる。マヤ地域には，少なくとも，南米的要素を石彫に関して探るのには苦労しなければならない。このことは南から北への文化的波及が，ニカラガの地域で終わったのではないか，ということを考えさせてくれるのである。

中・南米の先史時代に関しては多くの問題がある。特に編年的な問題は未解決であり，不明な点も多い。従って，両者の文化を編年的にとらえようとするとき，多くの困難につきあたらざるを得ない。中米の石彫品の問題を考えても，空間的なものをいかに時間的に整理していくかが，今後に残された問題であることを痛感する。

〔註〕

(1) 365 日一年の Haab をいう。

(2) Franch Jose Alcina: Manual de Arqueologia americana, p. 426, Madrid, 1965.

(3) Hewett, Edgard. L.: The excavation of Quirigua, Guatemala by the School of American Archaeology. XVIII Congreso International Americanistas Part II, pp. 241-248, London, 1913.

(4) Franch, J. A.: op. cit., pp. 428-429, 1965.

(5) Seibal の報告書は，まだ出ていないので，筆者が，1971 年に同遺跡を訪れたときに確認した

ことを根拠にして例証した。

(6) Trik, Aubrey S: Temple XXII at Copán. Carnegie Institution of Washington publication 506. Contributions to American Archaeology and History, No. 27, Washington, 1939.

(7) Spinden, Herbert J: The chronological sequence of the principal monuments of Copán (Honduras). XVII th International Congress of Americanists, pp. 357-363. Mexico, 1912.

(8) Franch, J. A.: op. cit. pp. 435-439. 1965.

(9) 筆者が1971年に訪れた Seibal 遺跡では，赤褐色に着色された石碑が，同遺跡の神殿の階段前に立てられていた。

(10) Coe, Micael D.: Mexico. Ancient Peoples and Places, pp. 130-143, London, 1965.

(11) Morris, E. H.; I. Charlot, and A. A. Morris: The Temple of the Warriors at Chichén Itzá, Yucatan. Carnegie Institution of Washington, publication 406. Washington 1931.

(12) Morris, Earl H.: Los mayas de la regién central de américa; El Templo de los guerreros. Carnegie Institution of Washington, publication supermental No. 4, pp. 7-12, Washington, 1931.

(13) Proskouriakoff, Tatiana: A Study of Classic Maya Sculpture, Carnegie Institution of Washington, publication 593, Washington, 1950.

(14) Kelemen, Pál: Medieval American Art, Masterpieces of the New World before Columbus, pp. 119-146, New York, 1956.

(15) Franch J. A.: op. cit., pp. 428-430, 1965.

(16) Cicco, Gabriel de. y. D. Brockington: Reconocimiento Arqueológico en el Suroeste de Oaxaca, Instituto nacional de Antropologia e Historia, pp. 12-65, Mexico, 1956.

(17) Strong, Wiliam D.: Anthropological Problems in Central America in "The Maya and their Neighbors", pp. 377-385, Univ. of Utah Press, 1962.

(18) Girard, Rafael: La Misteriosa Cultura Olmeca Ultimos descubrimientos de esculturas pre-Olmecas en Guatemala, pp. 17-70, Guatemala, 1969.

(19) Girard, R: ibid., pp. 38-43, 1969.

(20) Habel. S.: The Sculptures of Santa Lucia Cosumalwhuapa in Guatemala. Smithsonian Contributions to Knowledge, Vol. 22, Art. 3. Washington, 1878.

(21) Lothrop, Samuel K.: The Southeastern Frontier of the Maya. American Anthropologist No. Vol. 41, pp. 42-54, Menasha, 1939.

(22) "Alter-ego" は，人間像に動物の意匠を付加することによって，付加動物の分身，化身を意味し，同時に，他我の観念を示すものと考えられる石彫一般をいう。

(23) Lothrop, Samuel K: The Stone Statues of Nicaragua. American Anthropologist Vol. 23, pp. 311-319, Lancaster, 1921.

(24) Lothrop, S. K.: ibid., p. 314, 1921.

(25) Richardson, Francis B.: Non-Maya Monumental Sculpture of Central America in

"The Maya and their Neighbors", pp. 404-410: Univ. of Utah Press 1962.

(26) Stone, Doris: Introduction to the Archaeology of Costa Rica, pp. 41-45. Museo Nacional San Jose, 1966.

(27) Stone, D.: ibid., pp. 41-42, 1966.

(28) Franch, J. A.: op. cit., pp. 459-473, 1965.

(29) Verril, A. H.: Excavations in Coclé Province, Panama Indian Notes, Museum of the American Indian, Heye Foundation Vol. 4, No. 1, New York, 1927.

(30) Lothrop, Samuel, K: Coclé, An Archaeological Study of Central Panama. Memoirs of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology Vol. VII, Harvard University, Cambridge, 1937.

(31) 1971年，筆者が，パナマ国立博物館で実見したものである。従って，正式な報告書が出版されていないので，博物館のブリスエラ女史から聞いたことを要約して，両者の関係を指摘するだけにとどめたい。

(32) Gomez, Luis D.: Exploraciones arqueologicas en San Agustin. Revista Colombiana de Antropologia. Suplemento No. 1. Bogota, 1964.

(33) Dolmatoff, Reichel G.: Colombia. Ancient Peoples and Places, pp. 80-112, London, 1965.

(34) Coe, Michael D.: Una Investigacion arqueológica en la costa del Pacifico de Guatemala, Antropologia e Historia de Guatemala XI-1. pp. 5-15, Guatemala, 1959.

(35) Meggers, Betty J.: Ecuador. Ancient Peoples and Places, London, 1966.

(36) Borhegyi, Stephan F. de: Pre-Columbian Cultural Connections between Mesoamerica and Ecuador, Middle American Research Institution Publication 18. New Orleans, 1959-60.

(37) Coe, Michael D.: Archaeological Linkages with North and South America at La Victoria, Guatemala American Anthropologist Vol. 62, pp. 363-393, Menasha, 1960.
中米と南米の文化交流に関しては，この他多くの論文があるが，割愛する。